

OKADA-ROOM Vol.21

～岡田三郎助が残したもの～

会期 2021年8月21日(土)～11月4日(木)

岡田三郎助(おかだ・さぶろうすけ、1869～1939)は画家として活躍する一方で、教育者としても大きな存在感を發揮します。

岡田は、東京美術学校の助教授として1902(明治35)年から西洋画を教え始め、さらに、私塾本郷絵画研究所(本郷洋画研究所)を設立。また、当時先進的であった女性のための洋画教育にも取り組み、私立女子美術学校西洋画科で教鞭を執りながら、自宅に女子洋画研究所を私設しました。

こうした後進のための教育の中で、彼のもとからは、田村一男(たむら・かずお)、古沢岩美(ふるさわ・いわみ)、甲斐仁代(かい・ひとよ)など、後に活躍する数々の美術家たちが巣立っていきました。

また、岡田は、白馬会展に参加した山口亮一(やまぐち・りょういち)をはじめとするメンバーとともに、「佐賀美術協会」を創設し、佐賀では初めて、本格的に美術家たちが展示できる機会を与えたのです。

今回の展示では、教育者としての岡田に焦点を当て、岡田が残した名品と、彼が育てた洋画家たちの作品と合わせて御紹介します。岡田が残した“遺産”をぜひ御観覧ください。

なお、本展は9月7日(火曜日)から10月17日(日曜日)まで開催する、特別展「白馬、翔びたつ 一黒田清輝と岡田三郎助」にあわせて御観覧いただくことで、より深くお楽しみいただけます。

No.	作品名	作者名	制作年	寸法(本紙・cm)	材質	所蔵
1	朝鮮婦人像	岡田三郎助	1922(大正11)	45.5×33.5	油彩・画布	館蔵
<p>岡田 1922(大正11)年、第一回朝鮮美術展の審査員として日本統治下にあった朝鮮半島へ渡っている。恐らくはこの時、現地の女性をモデルに描いた作品であろう。固く結われた髷が初々しい印象を与え、ふっくらとした頬や唇の描写がなんとも愛らしい。背後に描かれた花は、現在の韓国の国花にも制定されているムクゲと考えられる。</p>						
2	風景	岡田三郎助	1919(大正8)	40.8×26.6	油彩・画布	館蔵
<p>アトリエ側から薔薇のアーチのある方向を見た光景。岡田邸宅の庭には多くの花々が植えられており、特に入口に設けられた薔薇のアーチは、訪れた人々が必ず目にする岡田のアトリエのシンボルであった。</p>						
3	藤山雷太像	岡田三郎助	1914(大正3)	92.6×72.0	油彩・画布	館蔵
<p>松浦郡(現・伊万里市)出身で、大日本製糖(現・大日本明治製糖)社長、貴族院議員などを歴任した実業家、藤山雷太(1863-1938)の肖像である。この絵が描かれたとき藤山は51歳、岡田は45歳。互いに、それぞれの道でキャリアを極めつつある時期であった。</p> <p>画面全体は柔らかく温かい色調でまとめられているが、一方で固く握られたこぶしや上向きの目線に、像主の堂々とした風格も感じさせる。</p>						
4	伊豆山風景	岡田三郎助	1935(昭和10)	65.1×100.1	油彩・画布	館蔵
<p>1935(昭和10)年、岡田は伊豆・熱海を訪れ、本作や《淙々園にて》などの作品を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。</p> <p>熱海には1895(明治28)年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、多くの文化人や観光客を集めていた。</p>						

No.	作品名	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
5	婦人像	清原重以知	1914（大正3）	114.1×80.0	油彩・画布	館蔵
<p>屏風の前に、正座姿でうつむく女性。彼女は日本髪を結び、和装に身を包むなど、江戸元禄風の雰囲気の色濃く漂う。東京美術学校を卒業して二年後、いわば清原の画業の最初期に当たる本作では、とりわけアカデミックで堅実な描写が際立っている。女性の横顔はやや後ろからとらえられ、その表情はうかがい知れないが、同様の構図は岡田三郎助など白馬会の画家たちも得意としたものである。</p>						
<p>清原 重以知（きよはら・しげいち、1888-1971） 1888（明治21）年、現在の徳島県阿南市に生まれる。本名は重一。1912（明治45）年、東京美術学校西洋画科を卒業。1920（大正9）年、同級生である萬鐵五郎、神津港人らと「四十年社」を結成。昭和初期から戦後にかけて官展や光風会展に出品、存在感を示した。主に静謐な抒情を湛えた具象画を得意とした。1952（昭和27）年には日展無鑑査となる。</p>						
6	婦人像	北島浅一	1919（大正8）	80.4×65.2	油彩・画布	館蔵
<p>北島浅一（きたじま・あさいち 1887～1948） 小城郡牛津町に生まれる。小城中学校を経て、1907（明治40）年東京美術学校西洋画科に入学。同級に御厨純一、萬鐵五郎らがいた。1912（明治45）年卒業。同年第1回光風会展に3点出品。1913（大正2）年第7回文展に初入選する。1919（大正8）年に渡仏、アカデミー・コラロッシンに学ぶ。1921（大正10）年サロン・ドートンヌに入選、翌年に帰国する。1924（大正13）年白日会に参加。この頃満谷国四郎の家の離れに住む。翌年、第6回帝展で特選受賞。1929（昭和4）年第一美術協会創設に参加する。</p>						
7	川上風景	御厨純一	1946（昭和21）	53.5×46.0	油彩・画布	館蔵
<p>御厨は長く東京で暮らしたが、郷里佐賀にも一貫して深く心を寄せ、晩年には佐賀に遊び、その風景を描いている。本作は現在の和南市川上町周辺、嘉瀬川の景色を描いたもの。遠景の色づく木々、近景の澄んだ川の流れなど、現在まで景勝地として知られるこの地の豊かな自然を、いかにも御厨らしい鋭敏な色彩感覚でとらえている。</p>						
<p>御厨純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948） 佐賀市に生まれる。明治45年東京美術学校を卒業し、1926（大正15）年に渡仏、主にパリに滞在した。1928（昭和3）年帰国までの間、サロン・ドートンヌ・ナショナルなどに出品。帰国後は第一美術協会創立に参画し、同展に出品するとともに帝展にも出品した。その後は海洋美術協会会員として海軍に従事し、多くの海戦画を発表し、海洋画家として活躍した。</p>						
8	箱根街道	高木背水	1933（昭和8）	96.8×130.0	油彩・画布	館蔵
<p>高木背水（たかぎ・はいすい 1877～1943） 佐賀市に生まれる。本名誠一郎。義兄に広津柳浪。1889（明治22）年上京、1893（明治26）年ごろ岡田三郎助を知り、翌年大幸館画塾に入り堀江正章らの指導を受け、のち白馬会洋画研究所に通う。1903（明治36）年エルウィン・ベルツ博士の朝鮮行に同行。翌年に渡米（1906年帰国）。1910（明治43）年渡英する。滞英中ロイヤル・アカデミーにも出品した。1915（大正4）年《明治天皇像》を制作。同年から1919（大正8）年まで朝鮮に滞在し、翌年に再渡欧する。その後朝鮮美術展設立に尽力し、帝展ほか光風会展、白日会展にも出品した。</p>						

No.	作品名	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
9	釈迦誕生(習作)	山口亮一	制作年不詳	129.9×96.9	油彩・画布	館蔵

仏教の開祖である釈尊（ブツダ）は、生まれた瞬間に両手で天と地を指差し「天上天下唯我独尊」と唱えたといわれる。本作はその故事に取材したもので、生まれたばかりのブツダがまさに言葉を発する場面である。ロンビニの花園の無憂樹の木の下で生まれたといわれる通り、中央のブツダを満開の花々が取り囲んでおり、誕生の喜びに満ちた祝祭的な雰囲気漂っている。

10	緑蔭読書	山口亮一	大正末頃	64.8×64.9	油彩・画布	館蔵
----	------	------	------	-----------	-------	----

大正後期頃の山口は、自邸の庭に集う家族の様子をたびたび画題とした。本作も、《木かげ》（1922年、佐賀市蔵）、《緑の庭》（1926年、当館蔵、第7回帝展出品作）などのそうした作例に連なる作品であろう。読書をする人物の姿は、左に余白を残す大胆な構図で切り取られ、木洩れ日や光陰の描写は筆触をとどめた力強い筆致や印象派風のコントラストによって描き出されている。

山口亮一（やまぐち・りょういち、1880-1967）

佐賀市城内の中野致明氏の次男として生まれ、6歳の時に医師山口亮橘の養子となる。1903（明治36）年、23歳で、東京の溜池白馬会研究所に入所する。その3年後には東京美術学校西洋本科入学し、1911（明治44）に首席で卒業。卒業後は、佐賀へ帰り洋画の普及に努める。1913（大正2）年に、「佐賀美術協会」を創立。開催の第4回文展に《わら家》が初入選。1918（大正9）年、第2回帝国入選の《燈火の静物》（作品は焼失）宮内省買上げを賜る。大正10年佐賀県師範学校教諭・佐賀県高等女子学校教諭・佐賀県高等学校講師を兼任。佐賀洋画研究所を設立。

11	薔薇	甲斐仁代	制作年不詳	44.0×27.0	油彩・画布	館蔵
----	----	------	-------	-----------	-------	----

女子美術学校で岡田三郎助よりアカデミックな洋画教育を受けた甲斐だが、その筆致はやがて師の画風から飛躍し、荒々しく伸びやかなものに発展していった。瓶に活けられたバラは形をデフォルメされ、まるで背景の壁紙と一体となって音楽を奏でているかのようだ。印象的な赤色は甲斐を特徴づける色といえ、他にも《静物》（1962年、当館蔵）など赤を鮮烈に使った作品を残している。

甲斐仁代（かい・ひとよ 1902-1963）

1902（明治35）年、佐賀市に生まれる。1919（大正8）年、青島女学校を卒業。同年上京、女子美術学校西洋画科に入学し、岡田三郎助に師事。1922（大正11）年、1920年社第2回展に三岸好太郎、吉田（三岸）節子らと共に出品。1923（大正12）年、第10回二科展に「ロシヤ婦人の像」が初入選、以後、埴原久和代、深沢紅子らとともに同展に出品。1925（大正14）年より、牧野虎雄の主宰する旺玄会にも参加する。1937（昭和12）年、石井柏亭、山下新太郎、安井曾太郎らが二科会を脱退後、創立した一水会に出品（以後1962年まで出品）。1947（昭和22）年、女流画家協会に会員として加わる。戦中戦後は、満州・中国北部あるいは日本各地を旅行し風景を描く。1963（昭和38）年、60才で没する。後年はパトロンであったブリヂストン社長石橋正二郎夫妻に支えられていた。油彩画の特性を生かしたのびのびとしたタッチを特徴とする。

No.	作品名	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
12	伊達跡風景	古沢岩美	1931（昭和6）	45.2×52.9	油彩・画布	館蔵

古沢 18 歳頃、岡田邸に寄寓して絵画修行をしていた若き頃の作品。渋谷区伊達跡（現在の渋谷区恵比寿）の岡田邸の近所にあった病院の夜の光景を描いたものである。

古沢は本郷洋画研究所でデッサンを学ぶ傍ら、欧州のような風景を探し回り、東京大学の構内や湯島聖堂などでスケッチを行ったという。本作もユトリロ作品のような雰囲気纏っており、本作を見た岡田は、「きみ、東京にもパリがあるんだね」と言って面白かったという。

古沢岩美（ふるさわ・いわみ 1912～2000）

鳥栖市に生まれる。1927（昭和2）年上京、岡田三郎助宅に寄宿、本郷絵画研究所に学ぶ。1931（昭和6）年光風会展等に出品。1934（昭和9）年岡田宅を去り、寺田致明、麻生三郎らと知り合い、またその後ダリにひかれ画風を一変し、1938（昭和13）年第8回独立展に出品。同年創紀美術協会を、1939（昭和14）年福沢一郎らと美術文化協会を結成する。戦後は1947（昭和22）年日本アヴァンギャルド美術家クラブを結成。1951（昭和26）年サンパウロ・ビエンナーレ展に出品。1955（昭和30）年美術文化協会を退会。女性をモチーフとする独特なシュールな世界を展開する。

13	薩南雪の景	田村一男	1977（昭和52）	145.5×89.5	油彩・画布	館蔵
----	-------	------	------------	------------	-------	----

鹿児島を代表する山、桜島を描く。国内の山岳や高原の風景を生涯の画題とした田村は、各地の名峰や景勝地に足を運び、その情景を寂漠とした独自の境地で表現した。本作は山肌を大きく、縦長に切り取る大胆な構図と中間色を主とした柔らかな色調で、雪を頂いた冬の桜島を表情豊かに描いている。田村は鹿児島に度々足を運び、多数の桜島図を描いている。

田村一男（たむら・かずお 1904～1997）

東京府豊多摩郡中野町に生まれる。1924（大正13）年、磯谷商店に入店し額縁作りに従事。また岡田三郎助が主宰する本郷絵画研究所に入り絵画を学ぶ。1928（昭和3）年、第9回帝展に初入選。1931（昭和6）年、第18回光風会展に入選。1940（昭和15）年、光風会会員となる。1946（昭和21）年、第2回日展で特選。1963（昭和38）年、第19回日本芸術院賞を受賞。1980（昭和55）年、日本芸術院会員となる。1992（平成4）年、文化功労者に選ばれた。一貫して山岳風景画を制作し、独自の恬淡とした画風が特徴である。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail: hakubi@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>